

# 養育里親

～もうひとつの家族～

17

坂口 伊都

## はじめに

実子の子育てでも悩むことは多いですが、里親をしていると、次から次へといろいろな出来事が起こるものだと感心します。ついこの間も、里母と里子のバトルが起きました。発端は、宿題の日記。予定表の宿題欄に日記と書かれていたので、「書いてしまいなさい」と伝えると、日記ノートを運ぶ配達員が事故をしたので宿題がなくなったと言います。何か変だと感じましたが、その日は黙って聞いておくことにしました。それが翌日も続いたので、「ノートがなければ別の用紙に書けばいいでしょう」と言うと、「皆がしていないからやりたくない」と言います。「それなら、ゲームをしなくてもいいのだね？」と聞くと「いいよ」と答えたので、ゲームを他の

場所に持っていきこうとしたところから、里子が抵抗を始めました。

最初は、売り言葉に買い言葉になっていたのですが、だんだんとエスカレートしていきます。「次に約束守れなかったら、ゲームなしと約束したよね」と私が言うと、「それなら母ちゃんのバックも捨てる」と持ち出します。「その約束はしていないし、そのバックはママの大事な物だから返して」「じゃあ、ぼくのゲーム返して」「このゲームは父と母がお金を出して買ったものだからあなたの自由にできる物ではありません」「じゃあ母ちゃんのバック捨てる」と取り合いになり、私のお気に入りの手提げがビリビリと破けました。

その後、里子が家を出ていくと言うので、「それなら児童相談所に電話だね」と言うと里子が、「電話番号教えて」「自分で封筒を見て調べ」と

伝えて様子見をしていると、電話をかけ始めましたが、里子の話し声は聞こえてきません。電話の履歴を私に見せ、「電話かけたし、これがかけた証拠や」と言ってくるので、「番号見せられても、電話で話した証拠にはなりません」「ちゃんと言ったし。忙しいから、後で連絡するって言ってたもん」「ふーん」、その後は、自分のイライラを落ち着かせるためにも黙ることにしました。すると里子が、「何で話さないの？」と話しかけてきます。「家を出ていくなら、話す必要はないでしょう」「別に話すぐらい、いいやん」「あなたがしたことは、家族と絶交するということだよ。父ちゃんとも兄ちゃんともお姉ちゃんとも絶交して、もう話さない、会わないということなの。あなたは、本当にそれでいいの？一緒に旅行したり、出かけたり、いろんなことをしてきたよね。家族何でどうでもいいの？母ちゃんは悲しいよ。傷ついたよ」と言うと、里子が「電話しようとして、こんなことしたらいけないかなあって思ったの…」と、ぼろっと言いました。里子から何かが落ちたようでした。

その時、この子を抱きしめたいと思いました。抱かれ慣れていない里子は身体中が緊張します。「大丈夫だから」とそっと抱きしめ、「一緒にいよう。辛かったね。ママも辛かったよ」と伝えました。この子を抱きしめるのは、これが最初で最後かも知れません。以前にこの子が、長期外泊から帰る時に「寂しくない。寂しいって何？」と言ったことを思い出しました。もしかしたら、寂しいという気持ちを少しは感じたのでしょうか。

仲直りは、何故かジュースで乾杯をしました。この間、私達はぶつかり合いながら関係を作ってきたのだと改めて感じます。言い争っている間も、どこか冷静でいる部分があって、私の想いがこの子に伝わるのではないかという期待もありました。

里子との関係は、実子のように力を持たない

赤ん坊から親子が絶対的な存在として共に生活をしてきたわけではありません。今回のように、親に「いけません」と言われ、親の物を捨てようとするに違和感がします。里子がしたことは、対等になるための引き換え条件を手にしたという印象を持ちました。関係性を崩す行動の線を越え、その意味が見えないのだろうとも感じ、実子が同じ行動を取ったら、私の感情がどう動くのか疑問です。子どもは、根本の部分で親に捨てられたくない、あるいは失いたくないと思っていますが、この子には、その部分が見えてきません。自分自身を丸ごと大人に委ねてこなかったのでしょうか。

この子を通して、改めて親子関係はどう作られてきているのだろうかと考えさせられました。この子との関係は実子とは違う培い方なのでしょう。前置きが長くなりました。今回も里親支援について書いていきたいと思います。前に挙げた里親支援は以下の7点です。

- ① 里子の生い立ち・背景を知る
- ② 里子の強み、弱みを知る
- ③ 里親自身の得意、不得意を知る
- ④ 里親家族のバランスを知る
- ⑤ 里親家族の周辺への働きかけ
- ⑥ 行政、地域への働きかけ
- ⑦ 何を目標にするか考える

④まで書いてきました。今回は、⑤と⑥の項目について書きたいと思います。どうぞ、最後までおつき合ってください。

## 里親家族の周辺への働きかけ

里親をしていく上で、どこまでに知らせるべきか、悩む事柄だと感じます。里子と生活を共にする家族は当然ですが、親戚にはどこまで了

承を得るべきでしょうか。知らせることはしていこうと思いますが、許しを得ることなのかどうかは未だにわかりません。

我が家の場合、里親登録をしていく時から両親に説明をしていましたが、その時は気に留めている様子を感じませんでした。私の母親（祖母）は、何も質問することもなく「私は反対だ」の返事で完結しようとしていました。これは、予想通りです。それにも負けず、里親制度について淡々と説明をしていきました。

その他の里親家族周辺の反応は、里子の姿が見えてこない内は、身近に起こることではないと感じるようで、説明をしても真剣に捉えようとせず、流して聞いているような印象も持ちました。里親制度の説明を聞いて、異論を唱える方はほとんどいないのですが、マッチングで里子が家に現れると、急にざわめき始めます。里子との交流が始まり、家にくる段階に進んでから反対の論調が顔を出します。

急に現実味を帯びると、未知なる世界に不安を感じるので、必死に止めにかかります。「私達を捨てるのか」「自分たちのしたいことばかりして勝手なことをしている」「仕事を家にまで持ち込むな」等の言葉で引き留めようとします。その中で、また一から里親制度について説明をし、社会的養護の場で育つ子どもの背景や戸籍に入るわけではないこと、目安として18歳、必要があれば20歳まで預かり、里親制度が終わった後は自立していく。自立ができるように、を目指しながら一緒に生活をしていく、費用については委託費が出る旨等を伝えました。

里親制度自体、不道德な制度ではないので、順を追って説明をすると反対する部分が見つからなくなります。ここまで、子どもとの関係を作ってきたから断るのは、その子を傷つける以外の何物でもないと言葉が出てきます。「子どもには罪はないから」という言葉が出てきます。ですが、残念ながら応援するという形での了解ではなか

ったです。

実際に里親をしている家族の姿を見て、何かを感じてもらうしか道はないと思いましたが、日々の生活の中での助けは求められないと理解しました。その後、里子との交流が始まり、手伝えることは手伝うと言ってもらいましたが、里子には可愛らしい表現が時にできなくなる時があるので、この子を預かってもらうことはしていません。たまたま出会った時に話をしてやると伝えていきます。

即決で反対した祖母も里子と出会い、この子も嬉しそうに「おばあちゃん」と呼ぶので、気持ちがおほぐれる場面もありましたが、お年玉を巡って怒りをかきました。里子は、もらったお年玉をその場で覗き、「何だ、千円か」と言って机の上に放り出したそうです。その行動で、祖母は傷つき、しばらく経ってから高校生の娘にその話をし、私が祖母から直に聞いたのは4月に入ってからでした。祖母に謝罪をし、知的障がいがあることや今まで暮らしていた環境の話を伝えましたが、聞き入れられない様子でした。

祖母は、孫である息子と娘に小さい頃から誰よりも多くお年玉を渡そうとするので、お金の額で愛情表現を示そうとするので、里子に対して孫とは区別をしていることがよくわかり、複雑な気持ちになります。

里子とお金が家族以外の周辺で絡むと、だいたい嫌な思いをします。以前にも書きましたが、子どもには罪はないと言ってくれた人が里子にだけお年玉を渡さないという選択をしたこともありました。その人に対しては、次の年から里子にお年玉を渡さないのであれば、他の子ども同士のお年玉のやり取りを辞めたいと申し出ました。結果として、お年玉のやりとりは続いています。

以前、ある方に里親の期間が終わったら養子縁組を考えているのか質問されたことがあります。今は、実子も含めて子どもが自立していく

ことしか考えていません。里親委託が終了してからも、この子の応援団として存在し続けようと決めています。里親委託でも、家族の周辺が揺れました。養子縁組となると財産分与が絡むので、もう一つ揉めるのではないかと感じます。養子縁組で、家族と苗字が同じになり、子どもとの関係も里母ではなく母となり、健康保険証も家族と別れず、親子関係が悪くなる時期があっても、いきなり親子関係が切れる可能性は里親よりも低くなるので、子ども時代にこそ養子縁組をすべきでしょう。ですが、措置費や里親手当の支給がなくなります。また、お金の話に戻りました。里親委託時、祖母から養育費はどうなっているのかと聞かれ、委託費の話をしたら里親をすることへの抵抗感が下がったことを思い出します。

この経験から、児童相談所が初めて里親委託を依頼する時点で、里親家族周辺の関係者に説明する機会を設けて欲しかったと感じています。行政から人が来て説明をするという儀式をするだけで、里親制度の意味合いが変わります。少なくとも「好き勝手なことをしている」とは言われなかったでしょう。

説明の内容は、里親制度、社会的養護の現状、この里親さんだからお願いしたいと思う子どもがいること等を伝えればよいと思います。後は、質疑応答の時間を設け、その子に話を進めていく了解を得るといった流れがあれば、我が家に起きたようなトラブルを回避しやすくなるのではないのでしょうか。

さらに、最近感じていることですが、児童相談所の方には、実子に対しても親がいない所で、里子が来ることをどう思うのか、里子が来てから何か困ったり、イライラして誰かに話したくなったら聞かせてほしいという言葉伝えて欲しいと思います。里親をやっている自分の親には言いにくいこともあるでしょうし、実子が一人で抱え込まないための予防線です。実子が児

童相談所の方に連絡する行為は、なかなかできるものではないと思うので、家庭訪問で会える機会があれば意識的に声かけをしてもらうことでも、実子の気持ちが軽くなるのではないのでしょうか。子ども自身が、しんどくなったら誰かに相談してもいいと知ることが大事だと感じています。



## 行政、地域への働きかけ

地域でも、どこまで里親をしていることを伝えていくのか同様に悩むところです。まず、日中に子どもがいる場所の幼稚園、保育所、学校に対しては情報共有が必要だと痛感しています。我が家の場合、最初の繋ぎの部分で児童相談所の担当ワーカーが窓口となって連絡を取り合ってくれたことでスムーズに話が進んでいきました。

里子は、児童養護施設入所時には特別支援学校に通学していましたが、支援学校の担任が地域によって特別支援学校の特色も違い、この子は支援学級の道も考えた方がいいのではないかと提案してくれました。その先生は、担当ワーカーや施設職員に熱く語っていたそうです。担

任の先生は里親にも会いたいと申し出てくれ、児童養護施設でお会いしました。その時、転校していくことについて、他の子どもへの説明をし、お別れ会もしたいので、この子自身に里親の所に行ってみないかという話がいつされ、学校としてどのタイミングで話ができるようになるのか等の確認をしました。里子に行くという例はまだなかったので、支援学校の先生も慎重に動こうとしてくれました。また、どんな人がこの子の里親になるのか見定めようとしていたそうです。他の先生方も心配をしているので、安心しても大丈夫と伝えますと言われました。先生方に出会えたことの意味は大きく、新たな生活を後押しする手の一つを担っていただきました。

新たな生活場面を設定していくために、児童相談所、施設、里親の三者で特別支援学校と地域の小学校の支援学級の見学をしました。この地域の支援学校は、重度の身体障がいを持った子どもが多かったので、支援学級を希望することになりました。見学の日には、教育委員会の担当者にも同行していただきました。里親というあまり馴染みのないことに対して、協働していこうとする姿勢は何よりの支援で、心強かったです。地域の小学校に登校したことがないこの子のために1学期末、体験入学が設定されました。一緒に授業を受け、給食を食べて昼休みを過ごし、優しいお兄ちゃんが、「〇〇くんこっちだよ」といろいろお世話をしてくれます。校長室にも呼ばれ、「どうだった？」と話を聞いてもらい、最後に「待っているからね」と声をかけてもらえました。この一言がたまらなく嬉しかったです。

2学期が始まり、支援学級担任はかなり戸惑っているようでした。この子も男性に懐いていくタイプなので、男性の担任を独占したがった時もありました。その担任の先生と、「この子の立場になってみると、今回の選択は新しいものば

かりでわからないことも多いでしょう。里親宅に行く決断をしてくれたこと、学校に行けていることだけでも大きな頑張りだと思う」と話し合い、今後も慣れてくるとだんだんと試すような行動も出てくる可能性についても確認しました。里親も子どもについて知らないことが数多くあり、先生からすれば里親と共にこの子を見守っていくところから始めるしかなく、苦勞をかけたと思います。担任の先生と里親がまめにこの子のこの様子伝えていきました。学校で悪さをすれば、家でも話をしましたと伝え、こんなことがありましたと微笑ましいエピソードが書いてあれば、家でも良かったねと話したことを返すというやり取りで、担任も里親も安心感が増していったと感じています。

委託時にしっかりと繋がるパイプができれば、担当者が変わっても関係が繋がっていきやすくなります。現に、児童相談所の担当ワーカーは、委託時から毎年変わり3人目の方になります。支援学級担任も委託の次の年に変わりましたが、5年と6年を受け持ってくれている先生とも、いろいろと情報交換をしています。それは、受け入れ時に丁寧に接してもらえたという信頼があるから安心して話せています。

この前も、担任と顔を合わせて話をした方がいいと感じたので、授業参観の後に家での出来事や学校への質問等を話し合うことができました。実際に聞いてみると、お互いに疑問に感じていた部分が解消され、この子を支えるために伝えていくことを一緒に決めていくことができました。具体的には、この子にとって、わかりやすいルールで動きやすくすることを目標にしました。学校は、子どもにが日中を過ごす場所で影響力も大きいので、足並みを揃えられることや子どもを理解しようとしてくれる姿勢が里親家族の支えになります。相変わらず言葉も悪いですし、言う事が聞けなくなる場面も多々あるようですが、先生から「優しくなった」「かわ

いい奴です本当に」「〇〇のこと、1年生が懂れていますよ」等の言葉を届けてもらえる時は、安堵しますし、心が温まります。

その他、委託時に児童相談所の担当ワーカーが市の障がい福祉課に繋いでくれました。放課後に学童か放課後等デイサービスの利用を検討していたので、その説明を受ける段取りの連絡を担当ワーカーが障がい福祉課へ入れてくれ、そこの誰と話せばいいかも伝えてもらいました。今まで行ったことがない課だったので、敷居が高かったのですが、一報が入ったことで戸惑うこともなく説明を受けることができました。結局、デイサービスを利用となりました。障がい福祉課から手続きが始まり、指定相談支援事業所で通所受給者証が発行され、放課後等デイサービス業者に辿り着きました。

サービスを利用していても勝手がわからないことも多く、お恥ずかしい話ですが、受給者証の手続きをされましたかとデイサービスの方に尋ねられ、慌てて手続きに行ったこともありました。デイサービスでの支援計画作成のために家庭訪問をして情報交換をし、デイサービスで悪いことをした時の対応方法を一緒に考えています。「お手伝いしたりしてくれて、ありがとうと言う前に悪いこともするから、もう惜しいなあと言っているんです」と教えてもらったり、この子の今までの生活と今との違いについて話しあいながら、この子の生活の変化について意識していきました。目の前のこの子を見ていると、背負ってきたものを見逃しそうになるので、話し合いの場は貴重ですし、歩幅を揃えていくのにも有効な時間になっています。

学校でも放課後等デイサービスでも、よく言われるのが「この子のことが、よくわからなくて」「どう、捉えたらいいか悩む」です。その言葉の背景には、接していて違和感を抱く部分があり、それが里親宅で中途養育されること、児童養護施設で生活をする子どもの感覚からか、

それとも知的障がい特有の理解の仕方からきているのか見えないという感覚があります。それは、里親も同様で、どういう言葉がけをしていけばこの子にとってわかりやすくなるのかの手がかりを掴みたい欲求に駆られます。この出会う時期に差がないので、同じところで迷子になっているかのようです。

里親をしていく上で、地域との連携は必要不可欠です。この子を一緒になって支えていく場で協働できることが何よりの支援になります。そこから責められてばかりいたら、子どもに優しくできず悪循環になるでしょう。児童相談所のワーカーに委託時、しっかりと繋げてもらったことの意味は大きかったと感じています。

## 終わりに

こうして改めて書いてみると、地域との連携は上手く滑り出しができたのだと実感しています。近隣に対しては、家族ぐるみでつき合いのある友人には、出会った時に里親をすると伝えましたが、それ以外の人には何も言っていません。聞かれれば答えますが、聞かれなければあえて言う必要はないかと感じています。

里子の同級生で上にきょうだいがいる子は、引越したわけでもないのに転校してくることを不思議がっていました。「〇〇がこの家で暮らすと決めてくれたからだよ」とだけ伝え、もっと質問されるかと身構えたのですが、それ以上聞かれませんでした。その子の親御さんは事情を知っているので、どこまで知っているかはわかりませんが、今も一緒に遊んでいるようです。

親という存在がよくわからなかったこの子も、他の友達の親子の様子を目の当たりにし、親が許してくれるかどうか運命がかかっているらしいことは肌で感じ始めているようです。学校の規則も、親がいいと言えれば許されるのではな

いかと思っている時もありました。

里親家族周辺への働きかけは、失敗したと思う部分が多くありました。その余韻は今も引きずっています。現時点で、里子を受け入れて育てることに反対する人はいませんが、良く思っていない人はいるのではないかと思います。

里親をするのは、わかりやすい大きな変化なので、そこに引っ張られる形で今まで眠っていた課題が浮き彫りにされることが起こります。この部分の解決はなかなか難しく、他の要因も絡まる形で今も存在し、それもストレスになり、里子との関係を築く上でマイナスに働いたことも否めません。里親をしていなくても、浮き彫りとなった課題はそれほど時期がズレることなく浮上してきただろうと思います。ただ、里子とのことに力を使いたいのに、違う部分に力を吸い取られていく感覚がありました。できるだけ里子との関係が安定するまでの2年程度の間は、できり限りストレスが減るように動く方がやりやすくなると思います。その為の役割分担を整理する余地はあるのではないのでしょうか。

